



岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Alcudia

O K A Z A K I
C I T Y M U S E U M S | VOL. 33
N E W S



エッセイ
市長と市民による展覧会

エッセイ
シュルレアリスム
— アルカディアを求めて

文様の世界 — こめられた先人の思ひ

剽窃かオリジナルか
— ピカソの表現を辿る

パブロ・ピカソ
「帽子をかぶった女の頭部」
1962年

MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

市長と市民による展覧会

館長 芳賀 徹

今年の春、4月末から5月末にかけて、埼玉県の川口市で「二人のクローデル展」というのが催された。

「二人のクローデル」というのは、19世紀末フランスの女性彫刻家でロダンの愛弟子であり愛人でもあったカミーユ・クローデル（1864-1943）と、20世紀フランスを代表する大詩人・劇作家で職業外交官でもあったポール・クローデル（1868-1955）の姉弟のことをいう。

カミーユは、十数年前に彼女と師ロダンの恋愛とその後の彼女の狂乱の悲劇を描いた映画が公開されて以来、日本でも人気が高く、近年だけでもすでに3回ほど作品展が開かれてきた。ポールは、1921年秋から1927年早春まで、正味5年ほど駐日フランス大使として政治・経済・文化の全面にわたって日仏関係の親密化のために大活躍し、詩人としては卓抜な洞察を盛った数々の日本文化論と『百扇帖』などの俳諧風短詩集を残したことで広く知られている。2005年には、彼の没後50年を記念して、私が組織委員長となって東京と京都で国際シンポジウムほかさまざまな記念行事を行ったばかりだ。

だが、この天才姉弟二人の作品を同時に、同一場所で展示するというのは、日本でも祖国フランスでもこれまでにないことだった。しかも、川口といえば鋳物の町としては有名だが、フランスともクローデル姉弟ともなんの格別のかかわりがあったわけでもない。私も、昨年の春、川口市の代表の方々何人かからはじめてこの企画の話聞いたときには、その唐突さに少々驚いた。サッポロビールの工場の跡地に市立のアートギャラリーが開設されて1年がたったのを記念して、展示企画会社が介入することは一切なしで、商工会議所、青年会議所や市民のNPO法人などの力だけで、これを実現するのだと、実に熱心である。

ポールのほうの著書や富田溪仙との扇面合作、肖像画や写真は、私たちの2年前の経験もあって、日本国内で十分に調達できる。だが、カミーユのブロンズ彫刻約50点やデッサンのほうはどうなのか、少々不安で訊ねると、これも前川口市長の永瀬洋治氏や現市長の岡村幸四郎氏が市民のヴォランティア数名とともに、一人の美術史家の案内で、前年にパリのポールの孫レーヌ・マリー・パリヌ女史を訪ねて直接に交渉し、すでに万事契約済みであるという。

私はいよいよ驚くとともに実に愉快、爽快に感じた。若干のお手伝いをするにすることにして図録の

ためのエッセイも書き、4月27日、いよいよ開会当日のシンポジウム参加のために川口市を訪ねると、これが2会場に分けてみごとに充実した展覧会となっているのに感服した。

一つは市内の味噌問屋だったという旧田中家邸の3階建ての洋館と和室である。前々ここを見学したときは狭すぎないかと心配したが、本来サイズの小ぶりなカミーユ作品が、『16



20歳頃のカミーユ

歳の私の弟（ポール）』の像でも、『幼い女城主』でも、『ワルツ』の石膏像でも、大小の応接間や旧事務室などにうまく収まっていて、しかも実に見やすい。一階の畳敷きの大広間の真中に、カミーユ最後のブロンズ大作『分別盛り』がおかれ、書院窓の棚にはブロンズと大理石の『炉端の夢』が飾られていたのは、ことによく、縁側（シヤチニヌ）ごしに日本庭園の緑の反射が映って、いよいよ美しい。日本趣味の作家でもあったカミーユがこれを見たら、さぞかし喜んだにちがいないとさえ思われた。

そこからヴォランティアの人の車でアートギャラリー「アトリア」に移れば、こちらはポールの『雉橋集』『百扇帖』『どいつ』などの貴重な作品集と、カミーユの小品群と『波』の大作。大いに見ごたえがあった。そして同日午後、市の総合文化センターの音楽ホールでは、会場を埋めつくした約600名の聴衆を前にして、私が基調講演というのをやり、私の他に専門家二人と前市長永瀬氏の四人で約2時間のシンポジウム。永瀬翁はこの展覧会に市民を動員するために、過去1年間あらゆる集會に顔を出してクローデル姉弟を語ってきたというだけあって、意気盛んに思いのたけを語った。しかも司会役の現市長岡村氏は、50歳台初めとお見受けしたが、これまたよく姉弟の作品を勉強していて、歯切れのよい闊達な司会ぶりだった。

二代の市長と市民だけの力で、約4000万の予算で企画し実現した斬新な展覧会。NHK新日曜美術館での紹介もあったからか、1ヶ月の開催期間に17500名の入場者があったという。



カミーユ・クローデル『分別盛り』1907年 ブロンズ

シュルレアリスム — アルカディアを求めて

学芸員 村松 和明

評価された岡崎の
コレクションとキュレーション

当館が中心となって企画構成し全国5会場を巡回させる「シュルレアリスム展—謎をめぐる旅」(4月7日—5月27日)の岡崎展が好評裡に終了した。総数150点以上が並ぶシュルレアリスム展は国内最大規模といえるが、その過半数が当館のコレクションである。関東地区の埼玉県立近代美術館で封切られた折には話題となって記録的な



会場風景、手前ブロンズ…ジャン・アルプ《攻撃的な果実》1965年 岡崎市美術博物館蔵

入館者を得た。美術専門誌の展覧会投票ランキングでは、開館したばかりで話題となっていた東京国立新美術館の「ポンピドゥーセンター展」に大差をつけて一位に選ばれた。国内のネットワークを大切にしながら、細部までこだわって地道に積み上げてきた展覧会ということが、一般の方から専門家の方まで高く評価していただけたということか。

また、カタログの売れ行きも例を見ないほど好調であった。それは、章立ても解説もすべて平易な表現を意識して書いたことから、シュルレアリスムの入門書として、また質は落としていないため研究者には有効な資料となったからかもしれない。表紙にはベルベットの加工を施すなど、視覚と触覚と物質感が融合して、マルセル・デュシャンの「アンフラマンズ (infrimance)」のイメージにも通ずるデザインに仕上がった。このように装丁やデザインにも手をかけたこともその一因であろう。さらに今回は、デュシャンが1947年のシュルレアリスム展のカタログに乳房のオブジェをデザインしたような、既成概念を覆すべく「毛むくじゃら」の特装版も250部限定で発行した。これは視覚的にはメレット・オープンハイムのオブジェ《毛皮の昼食》(1936年)を想起させるが、巻頭論文に拙著「シュルレアリスムの表皮」が掲載され、その表面と中身との連鎖が意識されている。つまりこの本自体が、視覚と触覚をとおして引き起こされるシュルレアリスムの「象徴的機能をもつオブジェ」といえるだろう。このようにさまざまな工

夫をこらした本展は、今までにない視点でシュルレアリスムを提示することになった。

常設展の必要性

当館は開館10年をめぐりに常設展示が可能な本館棟建設の構想があった。それに向けてシュルレアリストの作品も収集してきた。いうまでも無いが美術館にとって常設展はいわば心臓部である。今回の展覧会でも一部展示したが、岡崎にはシュルレアリストたちが指針とした

原始美術作品が300点ほどある。また、彼らは純真な子供たちの絵画にも憧れたが、これらはおかざき世界子ども美術博物館が国内でも有数のコレクションを持ち研究しているのだから連携して展示することができる。つまりシュルレアリスムの大きな三本柱は岡崎には十分に収蔵されており、世界的にも通用する常設展示ができる準備がすでにできているのである。今回の展覧会では、各会場でも「岡崎市美術博物館がこれだけの作品を収蔵しているながら常設で見られないのは残念」という声

アルカディアとしての美術館

当館は、10年にわたるシュルレアリスムの研究、収集のひとつの成果としてこの展覧会を全国に発信し、幸いにも評価をいただくことができた。さてこれからの10年、20年後はどのような展開となっているのだろうか。

私が開館当初、小誌に「アルカディア(理想郷)」という呼称を提案したのは、当館が常に理想とするヴィジョンを持ち続ける必要があると感じていたからである。次は常設展の実現。つまり市民の方々の身近にコレクションを置きながら、コミュニティーとしての文化施設の機能を果たすことだと考えている。そのときにはじめて当館は、市民の方々と共にあるアルカディアとしての美術館となることができるはずだ。



岡崎市美術博物館所蔵の原始美術作品によって再現されたアンドレ・ブルトンの部屋のイメージ



ベルベット加工のカタログ



「毛むくじゃら」の特装版カタログ



ギャラリートークをする筆者

会期 平成19年6月9日(土)～8月19日(日)

文様の世界 —こめられた先人の思ひ—

学芸員 浦野 加穂子

優雅な装飾品から日用品まで、私たちがとりまく様々なものには実に多彩な文様が施されています。これらの文様は装飾的な役割だけでなく、人々の祈りや願いなど心のあり方や考え方などを象徴してきました。今回の展示では、移り変わる日本の社会の中で生み出され、時代の変化を反映しながら多様な展開を遂げてきた様々な文様とその中にこめられた先人たちの思いをご紹介します。

I 祈りの文様

文様は世界各地で発生し、そのあり方は地域・民族などにより様々ですが、そこには文様を刻もうとする人々の意志が感じられます。原始時代の人々は、厳しい自然のなかにカミ(超自然的な力)を感じ、その力によってもたらされる災いから逃れるため、呪いなどを心の拠りどころとしました。出品資料の縄文時代中期の『深鉢』に表されたうずまきのモチーフは日本全国に広くみられ、植物の芽の成長の姿から生命の誕生を表すあるいは死などに関わる呪術的な要素を持つとも考えられています。縄文土器の文様は円・平行線・山形・格子などの幾何学的なモチーフを中心に発展しましたが、主体的な観念により表現されたものは、物語性文様と呼ばれ、うずまきの他、強い生命力や多産を象徴するヘビやイノシシ、あるいは人形などの具体的なモチーフを表したのもみられます。縄文土器の形や文様のなかには今日では意味のわからなくなったものもありますが、呪術的な意味や当時の人々の祈りが表現されているのでしょう。幾何学文様はその後も発展し、銅鐸や埴輪、古墳装飾などには、三角文、円文、渦文などが表されています。特に三角文は生命の創造や魔除けを象徴し、円文は太陽または権威の象徴である鏡を表すとも考えられています。



《深鉢》縄文時代中期 水汲遺跡 豊田市郷土資料館蔵

日本の古代には、想像以上に海を越えた交流が盛んであり、鏡や武器などの古墳の副葬品には龍、四神、神仙、唐草等の植物文など東アジアや西域の思想や文化が取り入れられた文様が施されています。飛鳥時代には仏教の伝来により仏像や仏具に施された唐草、蓮華、瑞雲などの文様が普及し、奈良時代には唐を経てペルシアなど西域の文様が

もたらされました。正倉院の御物には象や孔雀など異国の動物や鳳凰や宝相華などの想像上のモチーフが多く見られます。その背景には、これらの靈力のあるモチーフの文様を身の周りに施すことにより、その力を得ようとした古代の人々の願いが窺われます。平安時代には切金などの装飾技法が著しく発達し、信仰の対象である仏像や仏画の聖性を高めるため、華麗な装飾が施されました。



《涅槃図》室町〜江戸時代 大樹寺蔵

II 和の文様

日本の大きな特色の一つは四季折々に移り変わる自然です。日本の人々はそのなかで培った美意識から様々な文様を生み出し、万葉の昔から大陸文化の影響を受けながらも、独自の文化を育んできましたが、平安時代に入ると、漢詩から和歌へ、唐絵からやまと絵へと様々な面で異国文化の和様化が進みました。文様においても、桜や紅葉、千鳥や鹿など身近なものがモチーフに選ばれ、日本的な美意識に基づいた優雅で叙情的な文様が好まれました。『秋草文時絵提箱』に表されている秋草文様は、薄など秋の七草に菊などを取り混ぜたもので、可憐な秋草が寄り添うように咲く風情は、移ろいゆくものへの感傷を感じさせる日本情緒あふれるものです。また鈴虫を描き添え、その音色を想像させることにより一層深く秋を感じさせる細やかな演出がなされています。繊細かつ華やかな桃山時代を象徴する高台寺時絵様式の優品で、家康により寄進された品です。また自然の風景や和歌・物語などの題材が蒔絵などの工芸品に取り入れられ、絵画的な趣をもつ文様もみられます。なかでも竜田川と紅葉、住吉社と松原など歌枕となる地名と結びついた特定の情景を表した文様や『伊勢物語』を思い起こさせる八橋と



あきくさもんまきえさげばこ
《秋草文時絵提箱》桃山時代 松応寺蔵〔岡崎市指定文化財〕

杜若の文様などは、造形のみならず、背後に広がる詩歌や物語の世界を連想させる面白さをも兼ね備えています。また宮廷文化の中で貴族達は、家格・位階、儀礼などに応じて、浮線綾、立湧などの文様を自らの装束や調度品などに用いるようになり、有職文様として確立されていきました。その格調高い美しさは日本の「和」を象徴する伝統文様として現代まで受け継がれています。

Ⅲ 武家の文様

鎌倉時代以降は公家に代わって武家が時代の担い手となりました。なかでも群雄割拠の戦国時代に台頭した新興の戦国大名たちは、応仁の乱を経て伝統的権威が否定された大きな時代の変化の中で、新たな価値観を持つようになりました。合戦では自らの権力や存在を誇示するため華麗で斬新な文様の陣羽織や奇抜なデザインの変り兜などの武具を身につけ、またキリスト教の伝来や西洋との交易によりもたらされた十字架・南蛮船・カルタなどの当時の最先端である南蛮文化を積極的に取り入れ、異国情緒豊かな文様が施された服飾品や陶磁器類、



くろうるしぬりほんごねむらさきいとすがねおとしどうまるくそく
《黒漆塗本小札紫系素懸威胴丸具足》室町時代末期 三河武士のやかた家康館蔵

鍔や陣羽織などの武具などが好まれました。一方で戦に勝たねば明日のない激しい戦乱の世を生きた武士達は、武運と護身を切実に願いました。彼らの用いた甲冑や刀などの武具には、身を護り士気を鼓舞する龍や獅子などのモチーフや八幡神、不動明王などの姿や神号、輪宝等の法具など神仏への祈りを込めた文様が巧みに取り入れられています。

Ⅳ 庶民文化と文様

江戸時代になり世の中が安定してくると、文化・流行の担い手は経済力を背景に台頭してきた町人をはじめとする庶民に移りました。庶民の生活に根ざした日用品を取り入れた文様や宝尽くし、松竹梅に鶴亀などの吉祥文様、市松など歌舞伎役者にちなんだ文様などが次々生み出されました。また技術の発達にとともに新たな文様が展開し、染織では友禅染などの技法により絵画的な表現が可能となり、着物の文様が多様化しました。さらに多色刷が可能となった錦絵の登場により、着物の柄まで克明に表現できるようになった浮世絵や、「小袖雛形本」などのファッションカタログの版行により最新の文様が庶民の間に広がり、そこから新たな文様の流行が生み出されました。また外国との交流が制限されたことにより、我が国独自の新しい美意識による斬新な文様生まれ、江戸中期には対象を大胆に簡略化した尾形光琳ら琳派の作風をアレンジした「光琳文様」が流行しました。しかし度々の奢侈禁止令により、町人たちは禁令とされた華やかな絹織物の代わりに小紋や縞、格子などの柄を好むようになり、着物の素材も木綿が普及しました。三河は古来木綿の産地であり、日常着として普及した三河木綿は丈夫な地に渋い色目の細い経縞を特色としました。こうして表面的な華やかさではなく、裾裏の八掛や半襟など見えなところや素材に凝る「粋」の美の時代を迎えました。

現代を生きる私たちは、目まぐるしく変化する流行や氾濫する情報に翻弄される日々を過ごしています。しばし足を止めて、身近にあるものに施された文様に目を留め、そこに受け継がれてきた歴史やこめられた先人たちの心に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



あわせ
《女性外出着 袴》明治時代初期 個人蔵

剽窃かオリジナリティか —ピカソの表現を辿る

学芸員 千葉 真智子

パブロ・ピカソ (1881-1973) が、数多の芸術家のなかで最も有名な人物だということに反論する人はいないでしょう。今では、その名を知らない人の方が少ないのかもしれませんが。しかし、その認識の仕方や理解度について言えば、それほど高いものとは言えないのではないのでしょうか。例えば、実際には1908年頃から1910年代半ばという一時期に制作されたピカソおよびジョルジュ・ブラック、

またその理論や主義を明確に言語化してみせたアルベール・グレーズやジャン・メッツァンジェらの作品を称して用いられる「キュビズム」という様式名は、明確な定義を伴うことなく一般に広く浸透し、しばしば正面観と側面観が奇妙に組み合わせられた、歪んだピカソの描写方法を総称する言葉として使用され、またピカソの絵は全てこうした意味でのキュビズムの様式に従っていると捉えられているようです。ところが、20世紀最大の巨匠という神話化の影で、ピカソほど時代によって作風を大きく変化させた作家はおらず、その変わり身はときに「剽窃の画家」と称されたほどです。このことは、「巨匠」＝オリジナリティに溢れ、後続の作家の指針となる作家であるというイメージとは相容れないものだと言えるでしょう。早くも、1919年の個展の際に、当時の有力な批評家ロジェ・アラールは、「レオナルド、デューラー、ルナン、ファン・ゴッホ、セザンヌ、そうあらゆるもの、ピカソを除くあらゆるものがある」と評しており、23年には、画家ロベール・ドローネーがピカソのキャリアに見ら



図1 《テーブルの上のパンと果物鉢》1909年



図2 《アンブロワーズ・ヴォーラルの肖像》1910年

れる上っ面だけの折衷的な特質について、「様々な時代のピカソ。スタンラン、ロートレック、ファン・ゴッホ、ドーミエー、コロー、黒人、ブラック、ドラン、セザンヌ、ルノワール、アングルなどなど・・・それにピュヴィード・シャヴァンヌ、新イタリア主義・・・、こうした影響が見られるのは、構築や確かさに関して、ピカソに真面目さが欠けていたという証なのだ。」と軽蔑を込めて述べています。また、1965年には、日本でも美術史家高階秀爾が『ピカソ—剽窃の論理』として、ピカソが拠り所にした先例となる作品を列挙しており、没後に出版されたピエール・テクスの研究書の中でも「ピカソは単に、そして当然の如く、フランス絵画の伝統をその最も古典的な地点で確認しようと望んでいたのだ。ピカソが望んでいたのは、ブッサン、セザンヌ、アングルを取り込み、収束点とならんということであった。」と言及されています。

さて、こうした「剽窃の画家」としてのピカソ論は、枚挙に暇がないのですが、ここでいくつか引用したテキストからも分かるように、剽窃する「ネタ」として挙げられる作家はしばしば共通していて、いわゆる「フランスの古典の系譜」にあたる人物が多く見つけられます。

青の時代、ばら色の時代以後、ピカソは、多視点に基づく構築的な画面構成を特徴とするセザンヌのキュビズム(図1)から、暗い色調のなか切小面(ファセット)状に対象を分解させていく分析的キュビズム(図2)を経て、パピエ・コレやレリーフなど新たな空間表現を試みた総合的キュビズム(図3)に至りますが、第一次世界大戦が始まる1914年頃には、キュビズムを放棄し、ヴォリュームのある人物像を中心とした古典的な表現へと転身をはかります。(図4)それは《水浴する女たち》(図5)などにおいては、しばしばアングルの《トルコ風呂》や、シャヴァンヌの《海辺の娘達》(図6)からの直接的な構図の借用を指摘されていますが、このピカソの転身・剽窃の要因として近年の研究史の中で注目されているのが、いわゆる「古典回帰」「秩序回帰」と称される、第一次世界大戦に端を発し1920年代を通して高まりを



図3 《若い娘の肖像》1914年



図4《緑色のガウンの女》1922年



図6 ピエール・ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ
《海辺の娘達》1880年



図5《水浴する女たち》1918年

みせたナショナリズムという社会的・政治的な状況です。なぜなら、「キュビズム」は、この当時「ドイツ的（しかも軽蔑的な表現であるbocheの語を用いて、というのも1871年の普仏戦争以来、ドイツは、フランスにとって最も敵視すべき相手国となっていたからです）」な美術表現の最たるものと見做されていて、ピカソと懇意であった詩人アポリネールも、「フランス的」なるものへと新たな道を進むようピカソを鼓舞していたという事実があるからです。

スペイン人ピカソがフランスに同化すること、そのために「フランス的」な表現を選択するということが、当時どれほどの強制力を持ち得たかは慎重に考察すべきところですが、同じように、アンドレ・ロートやアンドレ・ドランをはじめとする「エコール・フランセーズ」の画家が、堅牢な絵画面を描き、モイーズ・キスリングやオシップ・ザッキンら「エコール・ド・パリ」と称される外国人（とりわけユダヤ人）画家たちが、自発的に前者の描写に倣い、またヴァルデマール・ジョルジュやヴィルヘルム・ウーデら外国人批評家が、巧に言動を制御することで、それぞれがフランスの美術界の中で安全な立ち位置を確保しようと試みていたことは念頭に置いておいても良いでしょう。

さて、このように指摘され続けてきたピカソの剽窃に関して、ロザリンド・クラウスは精神分析を用いながら興味深い考察を行っています。クラウスは、ピカソが「キュビズム」を自らが創始したのものとして嫉妬深く守り続け、キュビズム絵画が自由な色面や規則的な格子構造に基づく抽象的で客観性を持たない芸術と見なされることを嫌がり、またデュシャンやピカビアによって展開されたレディメイドと機械論的な戦略を生み出すものになったと捉えられることをひどく恐れたとし、その恐怖ゆえにキュビズムを放棄し古典主義へと転じたと指摘します。その上、逆説的にも、このピカソによる古典主義においては、正面向きのポーズや冷ややかな表

情、また何よりも硬質化した均一な線（それはプッサンからアングル、コローへと連なるフランスの巨匠たちによって用いられた定型化した線であり、また同時にピカビアがイラストレーションの中で用いた、工業製品のデザインに使用される、変化しない、大量生産のための線である（図7））など、まさに彼が軽蔑したはずの「機械論的」で「自動生産」な手法に基づいて作品が生み出されていると言うのです。（図8）

こうした様々なレベルにおいて、ピカソの「剽窃」を巡る議論は繰り広げられているのですが、こうした「剽窃」を介してなおピカソという作家の「個性」が事後的にであれ今日に広く認められていることは驚異的です。

ルートヴィヒ美術館コレクションは、初期から晩年まで、また油彩に限らず、水彩、版画、彫刻、陶器など幅広いジャンルにわたる作品を網羅的に含み、こうしたピカソの様々な表現方法を明らかにしてくれるものです。剽窃かオリジナルか、こうした議論も頭の片隅におきながら、本展覧会を楽しんでいただければと思います。

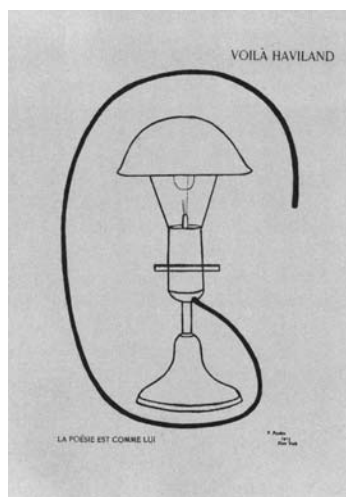


図7 フランシス・ピカビア
《これがハヴィランド》1915年

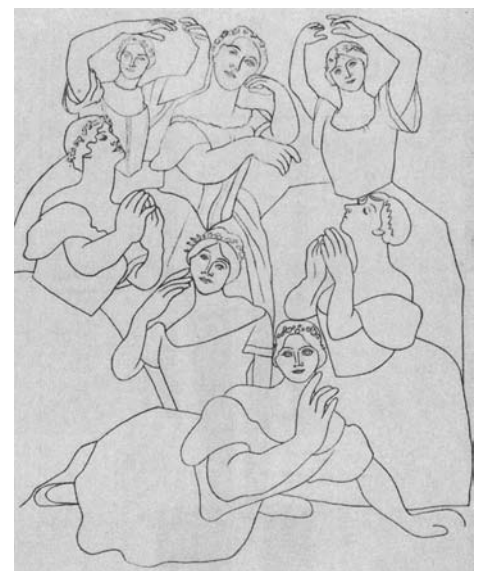


図8《踊り子たち》1919年

INFORMATION

■展覧会スケジュール

2007年6月9日(土)～2007年8月19日(日)

文様の世界展

私たちの身の回りの様々なものには実に多彩な文様が施されています。本展では考古資料、仏教美術、武具、美術工芸品などに表された文様の種類や意味を探るとともに、そこに秘められた歴史と文化をご紹介します。

2007年9月1日(土)～2007年10月8日(月・祝)

ルートヴィヒ美術館コレクション ピカソ展

20世紀美術最大の巨匠パブロ・ピカソ。本展では、旺盛な制作意欲より、次々に新しい様式を展開したピカソの全貌を、ドイツのルートヴィヒ美術館が所蔵する絵画・版画・彫刻・陶器等多彩な作品を通して紹介します。

2007年10月13日(土)～2007年11月25日(日)

特別企画展 茶の藝術 ～大和文華館のコレクションより

奈良にある大和文華館のコレクションからお茶をテーマに構成します。展示は国宝・重要文化財を含む美術品と、雙柏文庫(同館の所蔵)と称する歴史家、故中村直勝博士の貴重な文書を合わせ約120点で紹介する予定です。

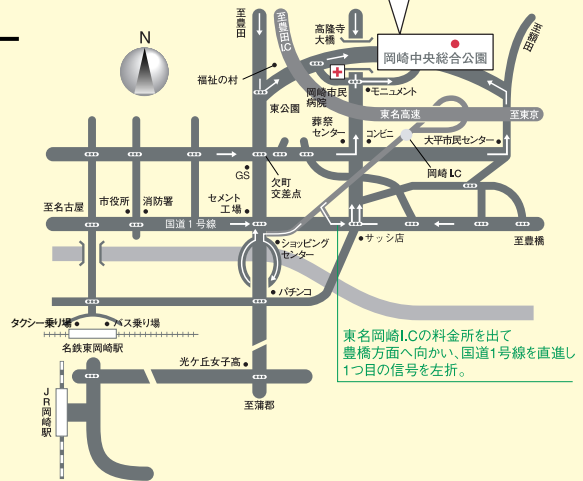
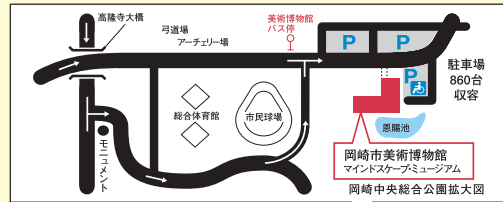
■サタデー・ナイト・シアター「アニメ大好き！」

第2土曜日・午後6時～鑑賞無料 先着70名 会場当館1Fセミナールーム

- 7月14日「王と鳥」(1979年/フランス/85分/監督ポール・グリモー)
- 8月11日「ファンタスティック・プラネット」(1973年/フランス+チェコ/74分/監督ルネ・ラルー)
- 9月8日「アリス」(1988年/スイス+西ドイツ+イギリス/84分/監督ヤン・シュヴァンクマイエル)

- 開館時間/午前10時～午後6時(～10/5)
午前10時～午後7時(10/6～10/8)
午前10時～午後5時(10/13～11/25)
〈入館は閉館時間の30分前まで〉
- 休館日/毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
※展示替えのため臨時休館することがあります。

- ◎公共交通機関/名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、
(名鉄バス)「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
- ◎タクシー/名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
- ◎自家用車/東名高速道路・岡崎ICから約10分



OKAZAKI CITY MUSEUM



【岡崎市美博ニュース/アルカディア】

●Arcadia 第33号 ●2007年7月発行 ●編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

岡崎市美術博物館

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL0564-28-5000(代表)

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/ka111.htm>



2100 本紙に古紙配合率100%再生紙を使用しています。